

佐渡 世界遺産見送り

文化審議 「有力候補となり得る」

国の文化審議会世界文化遺産部会は19日、2020年の世界文化遺産登録を目指す候補として、縄文時代を代表する大規模集落跡「三内丸山遺跡」(青森市)などを構成資産とする「北海道・北東北の縄文遺跡群」(北海道・青森、岩手、秋田)を選んだ。本県と佐渡市が登録を目指す「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」(佐渡市)は15年から4年連続で推薦を逃した。来年度、5回目の挑戦をし登録を目指す。(関連記事335面に)

縄文遺跡群を選定

県と佐渡市は今回の審議に向けて、佐渡鉱山の推薦原案を大幅に改訂。七つあった構成資産を西三川砂金山、鶴子銀山、相川金銀山の三つに絞り込み、西欧とは異なる鉱山開発技術の変遷など、佐渡独自の文化的価値の明確化を図った。選外となった理由について、佐藤信・同部長(東京大名書教授)は記者会見で「佐渡の普遍的価値を主張する上で、三つの構成資

産の位置付けを、より分かりやすく説明する必要がある」と強調。文化庁世界文化遺産室の渡辺栄一室長は「他の鉱山遺跡との比較研究を重視することが引き続き重要だ」と述べた。

一方、縄文遺跡群の次の推薦候補として「内定」したという意味ではないとした。佐藤は「昨年度からの進捗が見られ、縄文遺跡群に次ぐ案件として、有力な推薦候補となり得る」とも

普遍的価値の提示が鍵

「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」は4年連続で推薦を逃したが、国の文化審議会世界文化遺産部会から「有力な推薦候補案件となり得る」と評価された。登録表現には、世界に多くある鉱山との比較研究をさらに徹底し、佐渡独自の普遍的価値を示すことが鍵になる。県と佐渡市は今春に文化庁へ提出した推薦書原案で、鉱山の400年以上にわたる歴史の中でも江戸時

代が技術や組織体制に焦点を当てて独自の価値を強調した。構成資産も七つから三つに絞ったことから、同部会は「かなり絞られた案となり、分かりやすくなった」と評価。「委員の多くが佐渡は大変努力したと思っている」とも指摘した。来年度5度目の挑戦に向けては、推薦書原案の深化

が問われてくる。既に多くの鉱山が世界遺産に登録されており、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の審査は厳しくなっている。このような現状を踏まえ、県と市は今回、世界中の主な鉱山200余りと比較。特に世界遺産に登録される佐渡独自の価値の提示が関係者に求められている。

今回示された評価と課題を登録への一歩とするためにも、国際的な納得を得られる佐渡独自の価値の提示が関係者に求められている。

推薦見送りを受け、花角英世知事と三浦基裕佐渡市長は来年度、5回目の挑戦を表明した。国内推薦候補に選ばれたとされる。

縄文遺跡群は今回が6回目の挑戦だった。三内丸山遺跡のほか、配石遺跡「大湯環状列石」(秋田県鹿角市)など4道県にまたがる17の遺跡を構成資産とする。狩猟や採集などを基盤とした先史時代の文化を知る物証とされる。

推薦候補案件となり得る」と評価された。登録表現には、世界に多くある鉱山との比較研究をさらに徹底し、佐渡独自の普遍的価値を示すことが鍵になる。県と佐渡市は今春に文化庁へ提出した推薦書原案で、鉱山の400年以上にわたる歴史の中でも江戸時